山口大学教育学部研究論叢　第69巻　251頁～260頁　2020年1月

行為を表す新語の形成方法について
―「観察型」「共感型」という視点を用いて―

黒﨑　貴史*・有元　光彦**

On the Formation Method of New Words Representing Actions
―Using “Observation-Type” and “Empathy-Type” Viewpoints―

KUROSAKI Takashi*, ARIMOTO Mitsuhiko**

（Received September 27, 2019）

１．はじめに

黒﨑（2017，2018），黒﨑・有元（2018）において，「熟議」を用いた新語形成プロセスに関する研究を行った。そこでは，新語形成における熟議を「熟議課題に即した新語を形成するために，参与者（熟議に参加している者全員）が熟慮・議論すること」と定義した。そして，これを実験方法として採用し，言語行動の観点から，その参与者がどのように新語を形成し，決定するのかといった問題について論じた。結果として，熟議空間で起きている事象と実際の言語社会における言語事象との類似性を指摘した。これにより，実際の言語事象を熟議という実験方法により実験的に観測することが可能であることと，そしてそれによって，まだ表出していない言語事象に対する予測を提示することができた。

また，黒﨑・有元（2019）においては，参与者の視点に着目し，どのようなメカニズムで新語形成を行っているのかについて考察した。その結果，参与者は「観察型」と「共感型」という２種類の視点に立って，新語を形成していることが判明した（cf. 2節）。参与者は，これらの視点を自由に，無意識の内に選定して新語形成を行っている。このメカニズムに則って新語形成を考えることで，「好まれやすい新語とは何か」という問題を理論的に解明することに繋がると考える。

しかし，様々な課題も残った。その１つは，このメカニズムが熟議という方法論特有のものではないか，というものである。つまり，黒﨑・有元（2019）で提唱した観察型，共感型という視点は，果たして言語社会においても存在するものなのだろうか。これは，熟議という方法論が一般化され得るほど有用性の高いものであるか，という問題にも繋がる。

そこで，実際に言語社会で形成された新語の語構成に着目し，黒﨑・有元（2019）で提唱する新語形成メカニズムを適用できるか考察する。具体的には，実際の言語社会に既に存在するデータと，熟議によって得られたデータの比較を行う。本稿の目的は，若者語の語構成について言及することだけではない。実際の言語社会においても，観察型・共感型という視点に立って新語が形成されているのか，といった問題を検証することにある。

本稿では，「実際の言語社会で形成された新語」と「熟議によって形成された新語」を区別するため，前者を「新語」，後者を「実験新語」と呼ぶこととする。新語を「事物や概念を表すために，新たな語形や意味の拡張によって言語社会に形成された語」と定義し，後者を「熟議という実験空間において，熟議の参与者が熟議課題を言い表すために形成した語」と定義する。

２．先行研究

新語がどのようにして形成されるかという問題は，主に語形成論，認知言語学，命名論などで論じられる。しかし，実験的な方法論を用いて，その解明に取り組む先行研究はほとんどない。本節では，上述した各分野の先行研究について簡潔に述べる。そして，筆者が進めている熟議を用いた新語形成プロセス研究についても言及する。

２．１．新語の形成理由に言及した研究

米川（1989）は，新語が形成される理由として，「社会的理由」「心理的理由」「言語的理由」「言語感

＊山口大学大学院東アジア研究科コラボ研究推進体特別研究員　＊＊山口大学国際総合科学部

覚的理由」を挙げた。本稿で述べる新語形成は，言語感覚的理由に関連する。言語感覚的理由とは，言語の規範性が緩んだり，言葉遊びの感覚によって生まれたりするものである。

しかし，「言葉遊び」がどういうものなのか，新語のどういったところを「面白い」と感じるのかといった問題を理論的に言及した研究は少ない。そこで，熟議という言語実験空間における参与者が新語を形成している様子を観察することで，上記の問題を客観的に記述できると考える。

２．２．命名に関する研究

命名のメカニズムに言及した研究として，森岡・山口（1985），吉村（1995）が挙げられる。

森岡・山口（1985）は，「所属する範疇を示すはたらきを表示力（示差性）、そのものの特徴を理解させるはたらきを表現力（表意性）と呼ぶとすれば、命名と同時に大量の名がこの二つのはたらきをもつということは、やはり不思議な現象と言わなければならない」（森岡・山口1985：27）と述べ，表示と表現の働きに着目している。

例えば，（１）のように類（命名対象が所属するカテゴリーを表示することば）と種（命名対象が持つ特有の性質を表現することば）が，バランスよくとれたものがある。

（１）青りんご（種「青」＋類「りんご」）

しかし，（２）のように表示と表現のバランスは必ずしも一定ではない。

（２）東京駅（そのものを表示することに重点を置いている）
　　白銀（「かまぼこ」という類を表示しない）

森岡・山口（1985）は，命名の目的や命名対象の性質など，様々な要因で表示・表現のバランスが変容すると述べている。しかし，どういう要因によってどのようなバランスをとるか，という問題は不明なままである。

吉村（1995）は，命名対象の所属カテゴリーを表示することを「表示性（representativeness）」，命名対象の独自性を表すことを「表現性（expressiveness）」と呼んでいる。吉村（1995）は，行為に対する新語形成にも触れており，（３）のような問いを設け名付けさせるという調査を行った。

（３）最近、住宅事情等から遠距離通勤（学）する人が増えています。そこで、最寄りの駅などに一家の主婦（もしくは夫）が夫（もしくは妻）や子どもを車で送り迎えしている光景をよく見かけます。こうした社会現象、ないしは行動をうまく言い表すことばを作って下さい。

（吉村1995：343）

結果として，「見送り運転」「ママカー通勤」「アッシーパパ（ママ）」のような，現象を説明的に命名した，表示性を重視したものが多く造られた。一方で，「ブーメラン」「愛情直行便」など，「「見立て」を用いた表現性重視の名前」（吉村1995：210）も生まれた。

この結果に対して，「総じて「行為」そのものか，「行為者」の視点からの命名が多い」（吉村1995：210）と述べている。しかし，どの新語がどの視点に立って創造されたのかについては言及されていない。

命名論において，自然や商品名など〈モノ〉〈コト〉の命名については様々な分析が行われているが，行為に関する命名について扱った研究は少ないようである。そこで，本稿の提示する「観察型」「共感型」というメカニズムが，その問題解決に寄与できると考えている。

２．３．熟議を用いた新語形成プロセス研究

黒﨑（2017，2018），黒﨑・有元（2018）において，山口県在住の大学生と小学生を対象に，熟議という実験方法を用いた新語形成プロセスに関する研究を行った。新語形成プロセスとは，「熟議においてその参与者たちが新語を形成し決定するまでのプロセス」のことを指す。熟議は，参与者１人の発話と行動を表す「表態」と，そのまとまりで新語形成の作業工程を示す「新語形成フェーズ」という単位で構成されている。

熟議で形成された新語の中には，発話者の意図が反映されたモダリティ（cf.森山・仁田・工藤2000）を持った文レベルのものが存在した。このモダリティに着目することは，どのような視点で新語を形成するのかといった問題の解明に繋がると考えられるため，黒﨑・有元（2019）においては，この観点から熟議中に提示された新語の構造を分析した。熟議課題は「前から歩いてくる人とぶつかりそうになって左右に避けたらまたぶつかりそうになることに，名前をつけてください」というもので，大学生４名（全員19歳女性）が熟議に参加した。

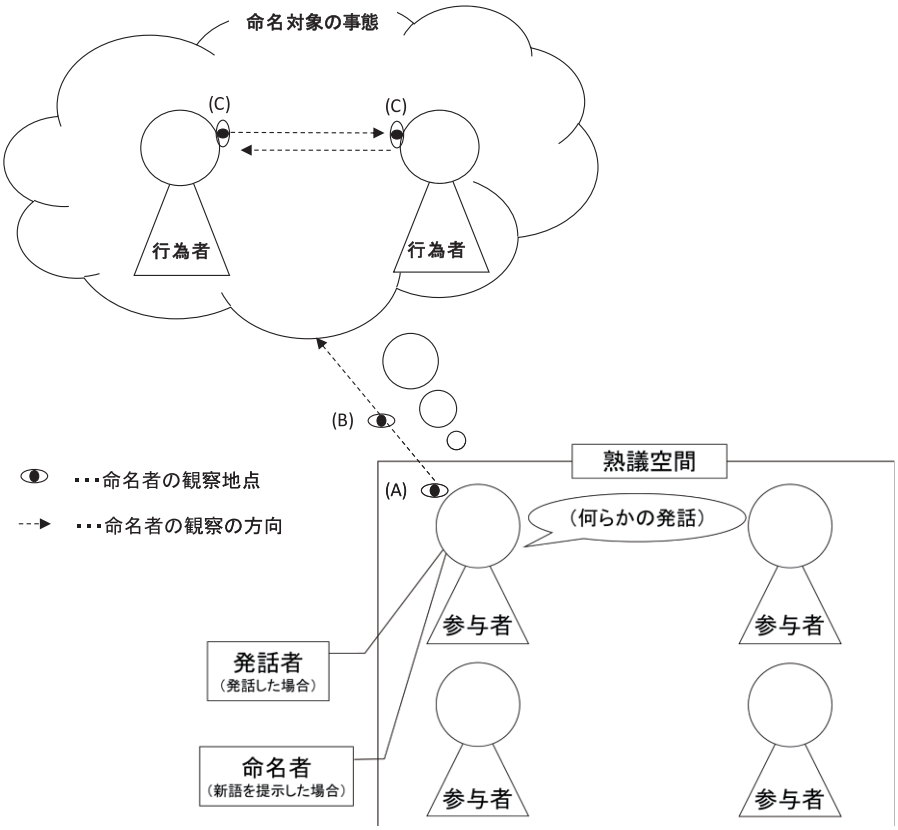
その結果，形成された新語の語構成に着目し，命名者の視点を「観察型」と「共感型」に分類した。前者は，命名事態を第三者的視点から観察し，その特徴に基づいてキーワードを抽出し，組み合わせて形成されるものである。そのため，新語は単語レベルのもの（複合語や名詞句も含む）である。観察型はさらに「表面的」なものと「心理的」なものに分類できる。「観察型：表面的」は，単に命名事態の特徴を表現するものである。それに対し，「観察型：心理的」は，その事態における行為者の動作から，その心理を推測して形成するものである。

それに対して共感型は，モダリティや感動詞など主観

的な言語形式で表されるものであり，行為者になりきって形成する新語である。そのため，この視点によって形成されるものは全て文レベルのものとなる。

これらのメカニズムを図式化したものが，【図1】になる。

【図１】熟議における新語形成メカニズム



【図１】の（A），（B），（C）は，事態を名付けた命名者の視点をそれぞれ示している。（A）は，観察型（表面的）を表しており，命名対象の事態から最も遠い位置から事態を観察し，命名する。（B）は観察型（心理的）を表している。（A）と同様，事態から離れた位置で観察しているが，行為者の動作や様子から感情を推測するものであり，その視点は（A）よりも行為者や事態に近い。一方，（C）は行為者と同一の視点で事態を観察する共感型である。観察型は，客観的に事態を観察するが，共感型は行為者に成りきっており，主観描写による命名を行う。

これらの視点は，命名者の命名事態の捉え方を示す。つまり，命名事態のどういった部分を意識して命名を行っているか，という問題を示す。一方，表示性・表現性は，それを受けて命名した際の，その表出の仕方の差といえよう。

３．言語データと調査方法

まず，実験新語としては，黒﨑・有元（2019）における言語実験から得られた，行為を表す新語を対象とする。

一方，実験新語と比較する新語も，意味的に同一カテゴリーのものを収集した。即ち，『若者ことば辞典』（米川1997）に収録された，行為を表す若者語162語を分析対象とした。対象とした若者語とその意味を【表１】にまとめたが，紙幅の都合上94語しか掲載できていない。

比較対象の新語データとして既存の若者語を用いた理由は，若者語は，これまでにない概念・事象に若者が命名したものであり，新語としての特徴を備えているためである。『若者ことば辞典』を選んだ理由は，1,150語に及ぶ若者語を大学生より収集し，その意味や用例を細かくまとめたもので，対象とする新語として適していると判断したためである。

【表１】『若者ことば辞典』より抽出した若者語とその意味

アデランス	かつらを着けること。	**ダンボ**	聞き耳を立てること。ディズニーのキャラクター「ダンボ」から。
アパガする	歯を磨くこと。歯磨き用品『アパガードJから。	**チェックいれる（チェック入れる）**	自分が気に入った異性や物に目を付けること。
アフター	会社・学校・クラブなどが終わった後に遊びや飲食にいくこと。	**ちくる**	先生や親などに告げ口をすること。不良の隠語。「告げ口」の「クチ」を音位転換したものか。
いきる（意気る）	調子に乗った言動をすること。	**ちょこがい（ちょこ買い）**	ちょこちょこと安い物，小さい物を買うこと。
イメチェン	「イメージチェンジ」の略。周囲に与える印象を変えるため，外見ややり方などを以前と変えること。	**ツーショット**	男女が二人で仲間から離れて仲良く話をすること。または二人でいること。
いわす（言わす）	①気に入らない者を呼び出して，仲間数人と一緒になって暴力を振るうこと。 ②喧嘩やギャンブル等で勝つこと。 ③食べる。ご飯を食べに行くこと。―「目に物を言わす」から。	**つぼにはいる（壺に入る）**	他の人にはそれほど面白くもないのに，一人だけ笑い続けること。
うんこすわり	和式トイレで大便をするような姿勢で道端などに座ること。	**つるむ**	たみろする。何することなく集まる。元は犯罪者隠語で，「仲間と悪さをする」という意味。
エスケ	仕事や授業等を怠けて休むこと。	**てつファミ**	徹夜でファミコンをすること。
エナる	ハイエナのように人にたかること。	**テルきゅう（TEL休）**	当日になって突然電話をしてバイトを休むこと。
おきべん（置き勉）	教科書・ノート等を学校の机やロッカーに置いて帰ること。	**ドタキャン**	直前になって約束や申し込みをキャンセルすること。土壇場でキャンセル。
オケしばく／オケる	カラオケに行くこと。	**ドリカムってる**	男2人，女1人で遊びに行くこと。グループ名「ドリームズ・カム・トゥルー」の略称「ドリカム」から。
おとなする（大人する）	普段の格好とは違い，大人っぽい服装をしたり厚化粧をしたりすること。	**なかぬけする（中抜けする）**	学校の朝のホームルームと終礼のときだけ学校にいて，あとは学校から抜け出していないこと。
おはなつみ（お花摘み）	トイレに行くこと。俗説では，しゃがんだ格好が花を摘んでるようだと考えられているが，本来は南洋で「花を摘みに行こう」と言って野原で用を足したことから。	**ナメナメ**	人に対してなめた態度を取ること。
おみあいする（お見合いする）	廊下や道でわざとではないのにお互いに通せんぼをしてしまうこと。	**にぎる（握る）**	カラオケに行くこと
おやぎり（親切り）	友達や恋人に電話をしたとき，本人ではなく親が出た場合に無言で電話を切ること。	**ねたおす（寝倒す）**	朝寝坊して，学校へ行かずにそのまま寝ること。
おりでん（折り電）	「折り返し電話」の略。	**ノーヘル**	ヘルメットを被らないこと。
かじてつ（家事てつ）	「家事手伝い」の略。	**ノバってる**	日頃から英語を使うこと。またはその様。
カセット／レコーディング	トイレに行くこと。録音するということから，「音入れ」→「おトイレ」。	**パーされる**	ナンパされること。
カンバる	会話する。「会話」表す「conversation」から。	**パーミング**	パーマをあてること。
キック	授業の単位を諦めること。「蹴る」とも。	**はかあなほる（墓穴掘る）**	「ぼけつをほる（墓穴を掘る）」を訓読みしたもの。
ぎゃくナン（逆ナン）	女性が男性をナンパすること。	**パクる**	①盗む。万引きする。 ②置いてある物を取って行く。―元は不良隠語。
キャピる	若い女の子のように振る舞うこと。	**ぱじる（馬耳る）**	人の話を聞かない。「馬耳東風」から。
キャンまち（キャン待ち）	「キャンセル待ち」の略。	**ぱちる**	盗む。関西の言葉。
きよぶたする	清水の舞台から飛び降りるつもりで，思い切って行動すること。	**はぶにする**	仲間外れにする。「はぶ」は「はぶく」からか，「はちぶ」からか。
きれる（切れる）	我慢できず，我を忘れて怒り出すこと。「堪忍袋の緒が切れる」から。	**はんけつ（半尻）**	1つの席（椅子）に2人が半分ずつ座ること。
ぐるぐるカラオケ	二人でカラオケに行くこと。歌う→曲を入れる→歌う…の繰り返しから。	**ビーアンドビー（B&B）**	異性と出かけて朝帰りすること。「bed」と「breakfast」の頭文字。
こうこうデビュー（高校デビュー）	①高校に入って非行に走ること。 ②以前は冴えなかった子が，急に様変わりすること。	**ピクる**	写真を撮ること。「picture」から。
ごち	ごちそうすること。また，ごちそうされること。	**ぶちる**	①授業をサボる　②約束をすっぽかす。「ぶっちぎる」の略か。
コピる	ノートや資料などをコピーすること。	**ぶらっち**	目的もなく外出してぶらぶらと熱き回ること。
コムる	カラオケで小室ファミリーの曲を歌うこと。	**へちる**	盗む。
コムロ	徹夜すること。「小室哲哉」の「テツヤ」と「徹夜」をかけた洒落。	**ベルうつ（ベル打つ）**	ポケベルにメッセージを入れること。
シージー（CG）	女子高生が遊び感覚で，テレクラに電話をかけて約束をし，それをすっぽかしたり，ナンパされに行って逃げたりすること。「cool game」から。	**ベルさっさ**	授業の終わりの合図のベルが鳴ると，さっさと片づけて帰ること。
しかと	無視すること。「しかと」は，花札の十点札に描かれた2匹の鹿が，互いにそっぽを向いていることから。	**ベルトーク**	ポケベル同士で会話をすること。
しかベル	かかってきたポケベルを無視すること。	**ベルまち（ベル待ち）**	ポケベルの返事を待つこと。
しくる	失敗する。それぞれ「しくじる」から。	**ほうぼく（放牧）**	色んな男性をあちこちでキープして，適当に付き合うこと。
じしゅきゅうこう（自主休講）	学生が勝手に講義を休むこと。	**マクドる／マクる**	マクドナルドに行くこと。
じらいふむ（地雷踏む）	相手の気にしていることを言ってしまうこと。	**マクべん（マク勉）**	マクドナルドで勉強すること。
シングルベル	クリスマスを一人（シングル）で過ごすこと。	**めんちきる（めんち切る）**	相手の顔をぐっと睨んで見ること。「メン切る」とも。元々は不良用語。
スタンバる	準備する。	**モスる**	モスバーガーに行くこと。
ストロベリートーク	恋人同士の甘い会話。	**もとさや（元鞘）**	カップルがよりを戻すこと。
ぜんとり（全取り）	受講登録した単位を全て取ること。	**やみチャリ（闇チャリ）**	学校に内緒で自転車通学すること。
そくさり（即去り）	終わったらすぐ帰ること。	**ユーかます（Uかます）**	Uターンする。
たいまんはる	1対1の喧嘩をすること。「1対1」を表す「マン対マン」の上略か。	**ゆうじょういっき（友情一気）**	一気飲みをさせられている人がもう飲めないときに，その友達が代わりに飲むこと。
タクつう（タク通）	タクシーで通学すること。	**ラッコする**	後ろから抱きつく。
たてのり	音楽に合わせて立って体を上下に動かすこと。	**リバる**	話しを聞き流す。「river」から。
タバる	タバコを吸うこと。	**ルーってる**	ルー大柴のようにくどくて，大げさでやたらと英単語を使うこと。調子に乗っている相手を馬鹿にする意味で使われる。
ためぐちきく（ためロきく）	年上，目上の人に友達と話すような口調で話す。	**ろチュー（路チュー）**	路上でキスすること。

上記の新語には，現在ではほとんど使用されていなかったり，普及の具合に大きな差があったりする。しかし，本稿は新語の形成方法に着目しているため，廃語化したような語もデータとして扱う。

また，『若者ことば辞典』に収録されている若者語は，主に関西の女子大学生が使用していたものである。若者語には使用者の位相差も影響すると考えられるが，本稿ではこの点については扱わず，今後の課題とする。

４．分析

本節では，新語および実験新語の語構成に着目し，命名者の視点について考察を行う。【表１】にまとめた若者語の語構成に着目し，観察型・共感型のどちらかへの分類を試みる。

４．１．観察型（表面的）

黒﨑・有元（2019）では，「鏡現象」や「ワイパー現象」といった実験新語が形成された。前者は，「向かい合った二人が同じ動きをする」という点を「鏡」という語を使って表しており，後者は，「左右に動く」という点を「ワイパー」に見立てている。このように，命名事態を観察し，その特徴からキーワードを抽出して形成したものは，観察型（表面的）という視点によるものと考える。

【表１】の「アフター」は，終業後に遊びに行くことである。これは，行為者（この語が表す行為をする者）の個別的な問題に関係なく，行為の特徴を説明的に表している。また，「アパガする」も「アパガード」という商品を使うという特徴に基づいており，行為者の個別性には触れていない。

このように，命名対象である行為を客観的に観察し，その特徴を説明的に述べることで形成された新語は，観察型（表面的）に分類する。

これは，吉村（1995）の表示性と類似しているが，必ずしも同一ではない。「元鞘」という語は，「元の状態に戻る」という意味から，カップルを鞘と刀に見立てている。吉村（1995）では，見立てによって形成された新語は表示性ではなく表現性によるものと捉えているが，本稿では観察型（表面的）に分類する。これは，別れた恋人同士が復縁を行うことを見立てによって説明しており，「アフター」や「アパガする」と同様，行為の特徴を示しているためである。

このように，吉村（1995）は，命名した際の表出の仕方に着目しているのに対し，本稿は事態の捉え方に着目しているという点で異なっている。

以上の考えに則って，収集した若者語の内，観察型（表面的）に分類されるものを以下にまとめる。

（４）観察型（表面的）：

アデランス，アパガする，アフター，言わす，牛しばく，うんこすわり，えがってる，エスケ，エッチする，エナる，お釜掘る，置き勉，オケしばく，オケる，お茶する，茶しばく，おちょくる，大人する，おばさんする，お花摘み，オビる，お見合いする，お持ち帰り，親切り，折り電，かけ，家事てつ，噛む，かもる，カンバる，キープる，キック，逆切れ，逆ナン，ギャグる，キャン待ち，きよぶたする，切れる，ぐるぐるカラオケ，携する，ゲットする，欠る，蹴る，告る，ごち，コピる，コムる，しかと，無視る，ムッシング，しかベル，しくる，まずる，ミスる，事故る，自主休講，シャギる，シャネる，地雷踏む，シングルベル，スタンバる，聖子る，ゼミる，攻める，全取り，即去り，たいまんはる，タク通，タクる，ダシュる，たてのり，タバる，もくる，やにる，ダビる，ダブる，ダブルヘッダー，だべる，ダベリング，ため口きく，ダンボ，チェック入れる，ちくる，ちょこ買い，ツーショット，壺に入る，つるむ，てつファミ，テトる，デニる，TEL休，ドタキャン，ドリカムってる，鳥しばく，鳥る，中抜けする，握る，抜く，ネズミしばく，寝倒す，眠リング，ノーヘル，ノバってる，パーされる，パーミング，爆睡，パクチャリ，パクる，ハゲる，馬耳る，ぱちる，パチる，ばっくれる，パニクる，はみ子，バリュる，半尻，B&B，ピクる，ビニる，ファクシミる，ファミる，ふける，ぶちる，ぶらっち，ぶらってる，へちる，ベル打つ，ベル飛ばす，ベルる，ベルさっさ，ベルトーク，ベルナン，ベル待ち，放牧，補助る，ボスる，ぼったくり，ホテる，マク茶，マクドる，マクる，マク勉，まじぼけ，まったりする，飯る，メッシング，めんち切る，モスる，元鞘，闇チャリ，Uかます，友情一気，よしぎる，ラーメる，ラッコする，リバる，ローソる，路チュー

これらを見ると，「名詞＋動詞」という構成をとり，前部要素と後部要素の格関係が「ヲ格」「デ格」のいずれかになるものは，観察型（表面的）に分類される可能性が高いのではないかと考えられる。例えば，「家事てつ」は，「家事を手伝う」となる。また，「ベルトーク」は「ポケベルでトークする」となる。それぞれ，格助詞が省略されている。

上記の例は，その行為が「どこで」「どうやって」「何を目的に」行われるものなのか，といった情報を示

している。これらの情報は，行為の内容を言い表す上で重要な要素であり，より詳しく意味を伝達することができる。例えば，「ベル」や「トーク」だけでは「ポケベルで会話する」という意味を伝えることはできないが，その２語を格助詞で結ぶことで伝達が可能となる。つまり，場所・手段・目的を示す「ヲ格」「デ格」によって，命名対象である行為の特徴を具体的に表すことができる。そのため，上記の格関係を持つ「名詞＋動詞」形の新語は，観察型（表面的）に分類されるのではないだろうか。

しかし，今回なぜ「ガ格」や「ニ格」が見られないのかは不明である。双方とも行為を表す上ではその特徴を言い表す重要な情報を示すものと思われるが，本稿では確認できなかった。今後，データを増やして追加調査を行う必要がある。

また，名詞がサ変動詞化した「スル形」や，「名詞＋ル形」が多く，これらも行為を具体的に示しており，この視点に分類されやすいのではないか。

スル形・ル形の新語は，「スル」や「ル」の前接要素がその行為の主要部分である。例えば，アパガードを使わなければ「アパガする」とは言えないし，マクドナルドに行かなければ「マクドる」とは言えない。つまり，これらの新語は，命名者が命名対象である行為を観察することによって，その内容や目的を具体的かつ簡潔に表したものであると考える。スル形・ル形の新語が形成される背景には，その行為を行っている者が多数存在しており，日常的なコミュニケーションで表現する機会が多いことが要因として考えられる。そのため，簡潔な表現によって情報伝達の手間を省いているものと思われる。

しかし，上記のような使用頻度の高い若者語とはどのようなものなのか，といった問題が残る。また，「スル形」や「ル形」が実際にコミュニケーションの簡潔化に繋がっているかという問題についても，客観的な分析をもって今後も考察する必要がある。

４．２．観察型（心理的）

前節では，行為そのものの特徴を捉える視点について述べたが，本節では命名事態の行為者に対しても意識が及んでいると考えられる視点について述べる。

黒﨑・有元（2019）においては，「気遣い過ぎ現象」や「譲り合い現象」など，行為者の心理的側面に言及しているものも形成された。このような現象は，観察型（心理的）という視点によるものと考える。上記の２つの現象は，実際に気遣っているのか，譲り合っているのかは，行為者自身にしか分からず，命名者の推測によるところが大きい。

【表１】の「意気る」は，「調子に乗っている」の心理的状況を表している。また，「ナメナメ」も「相手を見下す」という性格を示している。「キャピる」も「若々しくいたい」といった女性の気持ちを表している。これらも，前節で示した新語のように説明的であるともいえるが，行為者の心的描写を表している点が異なる。上述の例にしても，「この人物は調子に乗っているだろう」とか「見下しているに違いない」とか「こんな格好をしているのは若々しくありたいからだろう」というように，自身の経験に基づいて推測しているものと考えられる。

このように，行為者の心理的側面を推測して形成された新語は観察型（心理的）に分類される。収集した若者語の内，この視点に分類されるものは以下の通りである。

（５）観察型（心理的）

いきる，イメチェン，キャピる，高校デビュー，CG，ナメナメ，ルーってる

観察型（表面的）という視点は，行為の特徴を表すものであるため，非常に客観的である。それに対し，命名者が観察型（心理的）の視点に立つ場合，行為を観察する立場でもありながら，その行為を行っている者にも思いを馳せており，意識が行為者に近づいている印象を受ける。

４．３．共感型

収集した若者語の内，共感型に分類される新語が存在しない。共感型とは，行為者と同一の視点に立つという視点であり，語形は文レベルになりモダリティを持つ。例えば，黒﨑・有元（2019）の言語実験では，「運命感じちゃうよ現象」という実験新語が形成された。これには，「よ」という伝達のモダリティが含まれており，文レベルに相当すると判断できる。このように聞き手を意識していることから文レベルの実験新語は，行為者になりきっているものと判断する。この視点を，共感型と名付けた。しかし，既存の新語を見ても文レベルのものは見られない。それでは，共感型という視点は熟議と言う実験空間でのみ現れるもので，仮定する意義はないのだろうか。

ここで重要なのは，「なぜ共感型の新語はあまり見られないのか」という問題である。これには，新語の形式的な問題があるように思われる。また，少なからず文レベルの実験新語が存在しているが，選ばれにくい共感型の視点によって新語を形成する背景に，命名者のどういった意識があるのか，次節以降で，これらの問題について述べる。

４．３．１．形式上の問題

文レベルのものが形成されにくい原因として長さの問題が考えられる。

次の【表２】は，山口県山口市在住の大学生女性４名（全員19歳，以下「実験グループ①」）の熟議を文字化したものである。【表２】の列は４つの項目に分けており，左から「新語形成フェーズの種類」「表態」「言語行動」「話題に上がっている実験新語」を示している（cf.２.３）。

【表２】実験グループ①の熟議データ

提案	041177D：でもやっぱりさ、「**運命感じちゃうよ現象**」じゃない？	セリフ化	運命感じちゃうよ現象
中略			
提案	041191B：**道端で運命感じちゃうよ現象**。	セリフ化	道端で運命感じちゃうよ現象
審議	041192D：長いよ。 041193C：長いよ！だったら(ホワイトボードを指して)それ読んだ方がマシ。	拒否	

表態の項目には発話を記載しているが，左側の６桁の数字のうち，最初の２桁は言語実験番号である。次の４桁は発話の通し番号である。その次にあるアルファベットは発話者（参与者）の記号である。また，発話の中で太字になっているものが形成された新語である。

【表２】の場合，熟議の参与者Ｂ・Ｄが「提案」というフェーズで「セリフ化」という言語行動によって，それぞれ「運命感じちゃうよ現象」「道端で運命感じちゃうよ現象」という実験新語を提示しており，モダリティがある。「道端で運命感じちゃうよ現象」に対しては，それ以降で他の参与者がその実験新語について評価している（「審議」のフェーズに移行し，「拒否」の言語行動をとっている）。即ち，041192D～041193Cで「運命感じちゃうよ現象」という実験新語が長いため不適切であると述べている。このことから，新語として求めているのは単語レベルのものであり，文レベルのように長いものは単語として相応しくないという意識があることが分かる。

４．３．２．命名者の意識

しかし，必ずしも不適切と判断されるわけではない。熊本県八代市在住の50～60代の女性４名（以下実験グループ②）を対象に言語実験を行ったところ，文レベルの実験新語を形成し，最終的にそれが選ばれた。

【表３】実験グループ②の熟議データ

枠組み	110188A：こら別に八代弁ば大事にすっとあかんよね？ 110189ABCD：（笑う） 110190B：いや、/でもでも 110191D：　　/でも、八代弁でもいいですよーて 110192B：いいんじゃない？ 110193D：標準語でもいいですよーて	借用	
	中略		
枠組み	110197C：で、八代弁じゃなかなら、身近じゃないもんね？ 110198AB：うんうん（頷く） 110199D：そーそーそー。	借用	
中略			
審議	110461C：**なんさん右さん左さん**のニュアンスがね、多分おばちゃん達にはね、 110462A：（笑う） 110463C：ほぼほぼ分かると思うつたい。		なんさん右さん左さん

【表３】を見られたい。110461Cの「なんさん」は，八代市方言で強調副詞「とにかく」を，「右さん左さん」は「右へ左へ」をそれぞれ意味する。全体として，「とにかく右へ左へ」という意味になる。

このような文レベルのものが選ばれた理由として，仲間意識の強さが考えられる。110188A～110199Dを見ると，八代市方言を用いて実験新語を形成しようとしている。また，「八代弁じゃなかなら、身近じゃないもんね（八代弁じゃないなら、身近じゃないもんね）」という参与者Ｃの発話からも，方言を用いて仲間意識の強い実験新語を形成しようという意識が見える。若者語や集団語のような新語は，仲間意識を高めるために用いるという指摘があるように（cf. 山口 2007，米川2009），実験グループ②においても仲間意識を考慮して，方言を使用した実験新語を形成したものと考えられる。従来の方言研究でも，話者同士が親しい関係にある場合は方言が使われやすいといわれているが，文レベルのものである点は興味深い。

それでは，同じ方言話者同士であれば，必ず文レベルの実験新語を形成するのだろうか。実験グループ②同様，熊本県八代市在住の中高年層女性（以下実験グループ③）を対象に言語実験を行った。実験グループ③が形成した実験新語を全て挙げたものが（６）になる。

（６）実験グループ③の形成した実験新語：
シャドー，譲り合い，ミラー，ミラーリング，シンクロ

「譲り合い」のように，新語とは判断できないような語もあるが，命名対象である行為を言い表すために意味が拡張したものと判断する。

（６）を見ると，文レベルの実験新語は形成されなかった。その要因として，参与者間の関係性が関わっていると考える。実験グループ②は，４人全員が30年ほど前からの古い友人同士で，よく遊びにいく仲である。そのため，発話形式は非常にくだけたものになっている。一方，実験グループ③は職場の同僚同士で，先輩と後輩の関係に当たる。そのため，【表４】のように，熟議の始終，敬語を用いて会話している。仕事以外での交流はほとんどなく，遊びに行くような関係ではない。そのため，実験グループ②に比べ参与者の発話は畏まっている。

【表４】実験グループ③における熟議データ

認知	120043D：なんですか？ 120044A：いやいやいや 120045D：いやでも言わないと、ほら 120046A：結構よくありますよね？ 120047C：ありますね。		

このことから，非常に親しい者同士での使用を目的とするならば，文レベルの新語は容認されやすいといえるのではないか。実験グループ①も，学外での交流も頻繁にあり，よく４人で遊びに行く仲であるため，仲間意識は大きく関与していると思われる。

以上，共感型という視点について考察してきた。共感型という視点に分類される新語が少なく，文レベルの新語は形成されにくい。これは，長い新語は好まれにくいという意識が関与しているものと思われる。そのため，行為やその行為者の特徴からキーワードを抽出し，行為の目的や内容を簡潔に言い表す新語を形成する観察型が好まれているといえる。

また，文レベルの実験新語を形成し用いることは，稀ではあるが可能である。新語形成において，文を単語として認識するのは，形式上困難であるが，それをあえて崩すことで，「遊び」が生まれ仲間意識が高まる。そして，その崩しを行えるかどうかは，そのコミュニティにおいてそれが認められるほど親密な関係であるかどうかが重要である。

長さという問題に関して，2013年頃に「怒る」を意味する「おこ」という新語が，若者を中心に流行した。怒りの度合いに応じて「おこ→激おこ→激おこぷんぷん丸→カム着火インフェルノォォォォオオウ」のように，長さが変化するとのことである。ネット上での使用が多かったが，話し言葉としても用いられていた。

しかし，この語は定着することはなく，現在では見聞きすることは非常に少なくなった。これは，複合や混合といった方法で形成されていると判断できるが，非常に多くの単語が組み合わさってできており，一般的な複合語や混合語と比べ，非常に長い。こういった長さの問題から，最も親しい間柄や，個人を特定される可能性が少ないSNSやネットなど非常に限定的な場での使用しか認められなかったことが大きいのではないだろうか。

しかし，「おこ」といった比較的短いものは，現在でも見聞きすることがある。このことから，若者語のような新語においては，語形が短いものは許容度が高く，長いものは許容度が低くなるといえる。言い換えるならば，短いものは「ソト（外）」の新語で，長いものは「ウチ（内）」の新語といえよう。しかし，この二分化だけで説明できるかは今後の課題として考える。

５．まとめ

本稿では，黒﨑・有元（2019）で提唱した観察型（表面的）・観察型（心理的）・共感型という新語形成メカニズムが，熟議という実験空間だけでなく，現実の言語社会における既存の新語（行為を表す語）にも適用可能であるかどうかについて検証した。

『若者ことば辞典』に収録された，行為を表す新語を分析した結果，観察型（表面的）に分類されるものが最も多く，次いで観察型（心理的）に分類されるものが多かった。前者に分類される新語の構造を見ると，「名詞＋動詞」の構造になっているものは「ヲ格」「デ格」という格関係を持つものが多かった。これは，名詞と動詞を格助詞で結ぶことで，命名対象の行為の特徴を具体的に言い表すことができるためと考える。また，名詞を動詞化した「スル形」「ル形」の新語も，行為の目的を簡潔に表すことのできる形式である。

観察型（心理的）に分類される新語は，命名者が行為者の心情を推測することで生まれたものである。これには，「思い込み」に関連する問題もある。

近年の若年層が用いる表現として，「クナイ」という否定疑問形式がある。これは，「自分の考えが正しいだろう」という若年層のコミュニケーションスタイルを反映したものと考えられる[2]。

[2] 黒﨑（2019）において，話し手の判断の根拠が曖昧な文脈でも，話し手は文末形式クナイを用いて，聞き手に「確実な事態」らしい情報として伝えることができるとした。

以上のことから，現段階では観察型（表面的）による新語が多いが，今後は観察型（心理的）により他者の心理的側面を表現した新語が増加すると予測できる。

もう一つ大きな特徴として，共感型が実際の言語社会の新語には見られなかったという点が挙げられる。これには熟議の参与者間の親密度が関係していることが明らかになった。即ち，参与者間の親密度が高い場合は，共感型が観察された。このことから，モダリティを含む新語が言語社会において確認できない要因は，それが容認されるコミュニティが非常に狭く，それゆえ定着しにくいためといえる。省略形などの短い形式が広く浸透しているのは，多様な相手でも用いることができる，いうなれば「ソト」の表現という使用者意識があるためと考えられる。

以上の結果から，本稿で提示した観察型および共感型という視点は，実際の言語社会においても存在するといえるだろう。

新語や命名に関する研究は，語形成論や認知言語学等において扱われてきた。管見の限り，その多くがメタファーや見立て等，造語法の観点から述べられたものであるように思われる。本稿のように，我々がどのような視点に立ってどのような造語法を用いるのかという問題を追及することは，上述の研究分野に大きく寄与できるだろう。

しかし，多くの課題も残った。まず，今回の分析では「名詞＋動詞」の構造になっている若者語において，「ガ格」や「ニ格」は見られなかった。これらも，行為を言い表す上で重要な情報になり得ると思われるが，今後データを増やし，この格関係について分析および考察を行いたい。また，「スル形」や「ル形」のような語形とコミュニケーションの関わりについても，客観的に分析できる方法を考慮する必要がある。

次に，「カセット」「レコーディング」「コムロ」「はかあなほる」のように観察型・共感型のどちらにも分類できない新語が存在したことである。

これらは【表１】にも示した通り，音声的な面から形成された新語である。行為や行為者の特徴に由来しておらず，どういった視点に基づいて形成されたものか不明である。また，他の新語と異なり，なぜ音声的な操作によって形成されたのかも分からない。本稿で提示する視点という概念において，こういった新語をどう扱うべきか慎重に考える必要がある。

次に，新語における「ウチ」「ソト」という意識に関しては，今後も考察を行うべきだろうが，客観的に分析できる方法を考える必要がある。

次に，３節で述べたように今回収集した新語データに偏りがあることである。米川（1997）『若者ことば辞典』に収録されている語は若者語であるため，学術用語やそのたの集団語における新語は収録されていない。また，関西の女子大学生が主に使用する若者語を収録しているため，その新語がどれくらい普及しているのか，また性別や地域によりどのような違いがあるか，といった問題は不明瞭である。よって，今後，使用者の位相を考慮してその他の新語や俗語も対象にデータを増やし，詳細な調査をする必要がある。なお，【表１】の「お見合いする」の意味は，筆者の行った熟議実験の設定課題である（cf. ２.３）。新語においても，同様の意味を表す語が地域によって変わると考えられる。今後，様々な地域で熟議実験を行うことで，新語形成の地域差を見ることができるだろう。

また，方言使用と親密さに関しては，地域による違いもあるだろう。田中（2017）によると，地域によって方言使用と方言・共通語を使い分ける割合が異なる。使い分けを意識する地域において熟議実験を行うと，話者同士の親疎を反映した新語が生み出されやすいと予想できる。また，中年層は生育地方言に価値を見出す傾向にあるとも述べており，この世代を対象に熟議を行うことで，方言を用いた新語は収集できるだろう。これらの観点は，方言研究や語彙論研究に対して，地理的・位相的な視点から貢献できるものと考える。

一方，共時的な視点だけでなく，通時的な視点も必要だろう。通時的な新語研究において，明治期以降の新語を対象とする研究が多い（cf. 米川1989，1998，森岡・山口1985など）。

例えば，【表１】に「エスケ」という新語がある。これは，「授業を抜け出す」という意味だが，大正時代にも「エスケープ」という同様の意味の学生語が存在する（cf. 米川1989）。「エスケ」は，この「エスケープ」を省略したものと考えられる。本稿の考えに則れば，「エスケープ」も観察型（表面的）に分類できる。しかし，この視点は通時的に共通するものなのか。時代や社会に応じて変化するものなのか。今回は平成に用いられた若者語しか収集できなかったが，明治～昭和の新語も対象に分析を進めたい。

また，「エスケープ」は「エスケ」のように語形は変わっているものの，非常に息の長い新語といえよう。しかし，なぜこの新語が長い間用いられているのか。現段階では言及できないが，新語研究においてこのような新語の定着や廃語化に関する理論的な研究を，今後行うことも必要になるだろう。

新語とは呼べないが，文レベルのものが名詞的に振る舞うことがある。（７）と（８）を見られたい。

（７）そーゆー時は当たって砕けろだ!!

（2019/09　Twitter）

（８）まさに、猿も木から落ちるだなｗｗ
（2019/09　Twitter）

「当たって砕けろ」は，悩む相手に対して思い切って行動することを促す際に用いる慣用句であり，「猿も木から落ちる」は，「達人でも失敗することがある」という意味の諺である。上記の例では助動詞「だ」と接続しており，名詞として扱われている例といえよう。このように，イディオムは名詞的な振る舞いをする場合があり，この特徴は４．３．で述べた文レベルの新語と類似している。

宮地（1982，1999）は，イディオムの成り立ちをメタファーとメトニミーに分類しており，比喩が積極的に関わっていると述べている。では，これらの比喩法はどのような視点で選ばれているのだろうか。

今後イディオムを収集し，本稿で提示した観察型・共感型という視点がそれを用いた新語にも存在するか検証を行いたい。観察型・共感型という視点と，比喩というレトリックがどのような関係にあるのか。認知言語学的な観点から分析を進めたい。

新語においても，比喩によって形成されたものは多く存在する。また，比喩だけでなく複合や短縮など，多様な形成方法が見られる。４．１．で述べたように，「ヲ格」「デ格」の格関係を持つ「名詞＋動詞」の複合語は，観察型（表面的）に分類されやすい。このことから，形成方法と本稿で示した視点には，何らかの関わりがあるように思える。今後，新語の形成方法と視点との関連性にも着目して分析を進めたい。

多様な課題が残ったが，観察型および共感型という視点を仮定することで，若者語や方言といった使用者の位相に関わる語から，イディオムのようにある言語社会において広く使用される語に至るまで，その語がどういうプロセスで生まれたかといった問題の解明に寄与できることを示唆することができた。

調査資料

米川明彦（1997）『若者ことば辞典』東京堂出版

参考文献

黒﨑貴史（2017）「言語行動から見る新語形成プロセスについて―熟議を利用して―」『東アジア研究』15号　pp.51-70　山口大学大学院東アジア研究科
黒﨑貴史（2018）「熟議を利用した新語形成プロセスに関する研究」山口大学大学院東アジア研究科博士論文
黒﨑貴史（2019）「山口県若年層の用いる文末形式「～クナイ」について」第278回筑紫日本語研究会・九州方言研究会　発表レジュメ　於筑紫女学園大学
黒﨑貴史・有元光彦（2018）「熟議空間における廃語プロセス」『山口大学教育学部研究論叢』67巻　pp.253-260　山口大学教育学部
黒﨑貴史・有元光彦（2019）「熟議を利用した新語形成メカニズムについて―「観察型」と「共感型」という視点―」『山口大学教育学部研究論叢』68巻　pp.325-334　山口大学教育学部
田中ゆかり（2017）「全国２万人webアンケート調査に基づく方言・共通語意識の最新動向」『語文』158巻　pp.310-344　日本大学国文学会
宮地裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院
宮地裕（1999）『敬語・慣用句表現論―現代語の文法と表現の研究（二）』明治書院
森岡健二・山口仲美（1985）『命名の言語学　ネーミングの諸相』東海大学出版会
森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（2000）『日本語の文法3　モダリティ』岩波書店
山口仲美（2007）『若者言葉に耳をすませば』講談社
吉村公宏（1995）『認知意味論の方法　経験と動機の言語学』人文書院
米川明彦（1989）『新語と流行語』南雲堂
米川明彦（1998）『若者語を科学する』明治書院
米川明彦（2009）『集団語の研究　上巻』東京堂出版